

Title	他者の生を《なぞる》ための, 今ここの《なぞらえ》の世界 : アートベースで生きられる他者理解と社会学
Sub Title	Reliving and re-enacting others' experiences metaphorically : a sociological perspective using Arts-based Research to apprehend and understand a life
Author	澤田, 唯人(Sawada, Tadato)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2017
Jtitle	哲學 No.138 (2017. 3) ,p.9- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : アートベース社会学へ 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000138-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他者の生を《なぞる》ための、
今ここの《なぞらえ》の世界

——アートベースで生きられる他者理解と社会学——

—— 澤 田 唯 人* ——

**Reliving and Re-enacting Others' Experiences Metaphorically:
A Sociological Perspective Using Arts-based Research to
Apprehend and Understand a Life**

Tadato Sawada

1. Introduction: What does Arts-Based Research Study?
2. The Difference in Quality between Understanding and Apprehending a Life
 - 2.1 A Preliminary Consideration of How People Understand Others' Experience
 - 2.2 Apprehending a Life: A Case of Nursing in Terminal Care
 - 2.3 To Relive and Re-enact Others' Experiences
3. How Sociologists Reconstruct Lived Experience from the Perspective of Social Science
4. A Method Used to Replicate Lived Experiences through Art
 - 4.1 Sand-play Therapy: "Tree of Life" by Etsuko ITO
 - 4.2 Installation Art: "A Scene of Family Dining" by Tamae SUGIMOTO
5. Conclusion: Encountering Others' Lives through Arts-based Sociology

Key words: Arts-based Research as Sociology, Apprehension and Understanding of Others, Metaphoric Relationships between Art and Life, Qualitative Research in Sociology, Reliving and Re-enactment

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

1. はじめに

「誰かの経験を、別の誰かに伝える」

社会学で取り組まれてきたライフストーリー研究やナラティブ・アプローチのモチーフを、そのように表現することは可能だろうか。

この非常にシンプルにもみえる営みは、当然ながら一方では日常にありふれた営みでもある。恋人にふられて傷ついている友人のことを別の友人に伝えたり、子どもが生まれて幸せだと笑う近所の人のことを自分の家族に伝えたりと、私たちは（社会学者でなくとも）日頃から誰かの経験を別の誰かへと伝えている。

だが、他方で私たちは、この営みにしばしばつまずいてしまう。どんなにことばを費やしてみても、そして、たとえ相手が「あなたの伝えたいことはわかった」と言ってくれていても、あの人が経験したであろう大切なことを、伝え損ねていると思えることがある。反対に、ことばは少ないながらも——したがって届けられている情報は少ないにもかかわらず——、「私」を通じて、「私」が伝えようとしている人の経験が伝わっていくように思えることもある。そのようなとき、何らかの事実ではなく、誰かの経験を伝えるということが、とても不思議な営みのように感じる。

もしかすると、「経験を伝える」ということは、必ずしも事実を忠実に伝えるということ（情報の積み重ね）の延長線上に達成されるものではないのかもしれない。だとすれば人は（あるいは社会学者は）、いったいそこにおいて何をしているのだろうか。

こうした問いを質的調査をめぐる文脈で社会学へと投げかけるひとつの実践がある。近年、国内外で注目を集め、さまざまな試みがなされはじめている「アートベース・リサーチ（Arts-Based Research: ABR）」と称される調査パラダイムである（Rolling 2012; 原 2016, ほか）。

ABRは、その名のとおり、自他の経験世界について、アートベースで考え、理解し、そして伝えようとする研究プログラムであり、したがってそれは、最終的なアウトプットにおいても「文字媒体を中心とするテキスト」(学術論文)ではなく、写真や映像、パフォーマンス、演劇、インスタレーション、美術、音楽、さらには「文字媒体だとしても小説や詩、戯曲」(物語形式)などのアートワークにより公開される(伝えられる)(岡原・高山・澤田・土屋 2016: 65)。そうした作品を介することで、受け手は、他者(調査協力者)が生きた経験の意味やそれをめぐる研究者の洞察を、より深く理解できるのだとされる。

しかし、それはいったいどういったものなのだろうか。ここではまず、筆者自身の経験ではあるが、「視点」をその受け手へと移してみるのがひとつの手がかりとなるかもしれない。

筆者がはじめて社会学者によるABRの作品に触れたのは、2013年7月13日(慶應義塾大学の教員や学生などで運営されるラウンジ)「三田の家」でのことだった。その日、三田の家では『風の音が聞こえない』(関谷泉企画)というパフォーマンス・アートのイベントがおこなわれていた。

そもそもパフォーマンス・アートというものがどういうものなのか、即興的に観客も参加することがあるというくらいのことしかわかっていなかったのも、とても緊張していたのを覚えている。そしてその予感的中し、あるパフォーマンスの中に私も不意に参加することになった。以下はそこにおいて経験されたことの記憶である。

使い古された片手だけの手袋。それが小さな額縁に入れられている。それが誰の、どんな経緯の手袋なのかはわからない。わからないのだけど、額縁に入れられていると、誰かにとって大切な人の遺品のように思えてくる。知らない人の遺品。パフォーマーはそれを不意に私のほうにゆっくりと差し出す。何の言葉も誘いもない。けれど、私はどうすればいいのかを考えること

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

もなく、額縁のガラス越しにその手袋へと自分の手のひらを重ねる。そうすることが何か当たり前のように身体が動いていたように思う。かつて誰かがそうしたように、私もしたといえはいだろうか。そうすることに合理的な理由も規範的な理由もない。ただそうすることが誰かの生にとっては必然だったことのように感じたのであり、自分もそうしてみることでその誰かの生にほんの瞬間重なったようにも感じられた（写真1）。



写真1 北山聖子のパフォーマンス（右）と手袋（左）

このパフォーマンスは、ABRとも社会学とも関係なく、現代美術家（パフォーマンス・アーティスト）の北山聖子によるものであり、それは彼女によれば、「若くして亡くなってしまった友人に捧げたパフォーマンス」であったという。北山のプロフィールには、「観客の1人をパフォーマンスに引き込む『コンタクト』、自身とマテリアルとの間に意味を生成させてゆくパフォーマンスなどを展開する」とある（北山 2016）。彼女のパフォーマンスのなかで私が体験したこと、かつて誰かがしたことを自分もしているという感覚、いったいそれは何だったのだろうか。アートとは、この世界の中で何をしているのだろうか。

そのようなことを想っていると、いよいよ社会学者によるパフォーマン

スの番になった。先ほどの作品よりも、社会学的な問いや思考がわかるの
だろうと半ば期待していた。

壁のスクリーンに何かが拍動する映像が流れる。同時に、ドクドクという
心拍音の低い響きに空間が満たされる。途中、これにスーゼーゼーとい
う呼気と吸気のような音が重なる。これらが、私の胸骨にまで響いて、次第
に自分の鼓動や呼吸も乱れていってしまう予感がする。いつそうなるのか不
安になる。パフォーマーはその中で自身の顔や手、足を白い包帯でぐるぐ
ると巻きはじめる。それが彼の口元を覆ったとき、私はとても息苦しくなる。
パフォーマーは包帯で呼吸も視界もおぼつかないようにみえる。それでも空
間全体が発する喘ぐような息の中を、動き、歩く。喘息の発作。彼は大きな
四角い机のうえに仰向けになる。かみ砕かれた氷が口から飛び散る。息をす
ること、せき込むことが彼にとっては固まった息を肺で砕くことのようにあ
り、また息を吸うことが息に塞き止められることのようにでもある（写真2）。



写真2 岡原正幸のパフォーマンス

この社会学者・岡原正幸による ABR のパフォーマンス作品を前に、私
は彼が生きた身体のあり様や生の不安のようなものを受けとめていたよう

に思う。ただし、それは決して私の眼差しの先で起こる一個の事実として理解されるものではなかった。だとすれば、私はそれをどのように、またどのようなものとして理解したというのだろうか。

北山と岡原のパフォーマンスは、いずれも私に他者を感じさせるものであった。かつて誰かがしたことを自分もしているような感覚、かつて誰かが経験したことを自分も経験しているような感覚。しかしそれは絶対的に私には所有＝消化しきれない〈他者〉のそれであること、はじめて正面から触れたパフォーマンス・アートの経験は、そうした〈同〉と〈他〉が喰いあうような特異点としての「私」をうみだしていた。

しかし一方で、北山のパフォーマンスよりも岡原のそれのほうが社会的であるということが意識されなかったために、私のなかには「これのどこが社会学なのだろうか」「なぜアートでなければならないのだろうか」という問いも生まれていた。もちろん、ABR 関連の先行研究を参照すれば、そこには、構築主義的な哲学によって（社会学が扱う）「現実」と（アートが創作する）「フィクション」との境界はもはや無効化されている、という抽象的な応答をみることはできる（岡原 2013）。

だが、いま一度、実践的なレベルにおける質的社会学のモチーフ（「誰かの経験を、別の誰かに伝える」）に立ち還るならば、他者によって生きられた経験が、①アートを媒体に「伝わる」ということ、②またそれが社会的な「他者理解」に資するということが、それほど自明な事柄ではない。少なくとも私は、北山と岡原のパフォーマンスに触れるなかで、自分が誰の何を伝えられ、自分がそれをどのようにして理解したのかについて（先述した以上のことは）何もわかっていない。

けれども、わかっていないにもかかわらず、私はそこで、誰かの生にとってはそれが必然だったことのように、手のひらを重ねたり、呼吸が乱れたりしている。そのような意味ではやはり、私は誰かの何かを伝えられ、誰かの何かを理解している（ようである）。しかしだとすれば、このよう

な特異な位相での試みは、これまでの社会学との関係性において、いったい何を、どのように語ろうとしているのだろうか。

本稿では、こうした問いをめぐって、(質的調査に基づく社会学に課せられてきた)他者が生きた経験を「理解する」「伝える」という営みに照準しながら、アートベースでの実践が何をしているのか、その内実とそこに生成する社会学のかたちを考えていきたい。具体的には、他者の生をめぐる質的な理解とはそもそもどのような条件のもとで可能となるのかを確認したうえで、社会学的な認識論(多元的現実論)と、アートベースでの他者理解を先導してきた精神科臨床における実践事例を通じて、社会学とアートが結ばれる認識論的な地平へ降りたっていく。

そこに浮かび上がるのは、他者が生きた経験を身をもって《なぞる》ために、今ここに《なぞらえ》の世界を創出するという人間的な営為である。

2. 〈他者理解〉の条件——あるケアの場面から

2.1 予備的考察

「他者理解 (understanding of others)」をめぐる問題は、よく知られるように、社会学において最も重要なテーマのひとつであり続けてきた (Weber 1913=2002; Garfinkel 1952)。直接的にはアクセスできないはずの「他者」の経験や行為を、「私」たちは社会的に分有された方法によって理解している。「あなたは怒っている」「あの人は授業をしている」と、わざわざ言葉にしない場合でも、私たちが一目で他者の感情やふるまいの意味を理解できるのは、日常言語を習得する過程において、「文化的な知識および理由付けの慣習」を身につけているためである (Coulter 1979=1998: 201)。

このことをよくあらわすのは、向き合った他者の表情を理解する場面である。

例えば、ある人の「泣き顔」が目前にあったとしても、それだけでは、悲しくて泣いているのか、悔しくて泣いているのか、それとも嬉しくて泣いているのか、はたまた痛くて泣いているのか、その人の想いはわからない



写真3 ヨーロッパ室内陸上競技大会（2013年，スウェーデン）の五種競技で金メダルを獲得したアントワネット・ナナ・ジムーさんの「嬉し」涙
（出典：AFP World Academic Archive / 撮影：Jonathan Nackstrand）

い（写真3左）。けれども、その表情がどのような社会的状況に埋め込まれているのかを理解することによって、私たちは他者が抱いている感情に言葉を与え、これを理解することができる（写真3右）。

このように、「他者の経験を理解すること」とは、対象として知覚された他者のふるまいに、それが埋め込まれている「相互行為の文脈」や「状況の定義」から、合理的に説明可能（accountable）な意味（「動機の語彙」「感情の語彙」etc.）を与えることである、とすることができる（Mills 1963=1971; Goffman 1974）。確かに、他者の経験（＝図）が、それを取り囲む（あるいは対話の中で語りだされていく）社会的文脈（＝地）の中ではじめて意味を結ぶということは疑いようがない。

しかし、その上で問わなければならないことがあるようにも思われる。それは先ほどのように、知覚された他者のふるまいに言語的なカテゴリーを帰属して経験を理解する場面では、自己と他者は互いに向き合うような「対峙する関係」にある、という点に関わっている（岡田 2013）。このとき、「他者」はあくまで「私」の世界の中にあるひとつの対象としてまな

ざされ、類型化され、その意味秩序の中に理解可能な一個の客体としての位置を与えられていく。だがそうであれば、「私」が「他者」の経験を理解するというのもまた、実は絶えず「私」の世界の意味秩序の中で起きている一個の事実の理解へと横滑りしていきのたとは言えないだろうか。例えば、「あなたが悲しみの中にいる」ということ、これを、たんにそこで起きている事実として理解することと、まさにそこで生きられている経験として理解することとのあいだには、同じ理解ではあっても、決定的な落差が存在するように思われる。

こうした「私」が誰かの経験を理解する際に生起する二つの位相は、おそらく通常は曖昧であり、鮮明に意識されることは少ない。しかし、ときに両者は決定的な感覚の落差とともにすれ違うことがあるようにも思える。例えば、人は（少なくとも私は）、目の前で他者が苦しんでいることを、あくまでもそこにあるひとつの事実としてだけ理解することがあるし、むしろそうすることで迅速に助けを呼ぶなどの行動を取ることがある。反対に、一事実としてではなく、まさにそこで生きられている経験として他者の苦しみを理解してしまった途端、まったく動けなくなってしまうこともある（澤田 2014a: 53）。こうした感覚の落差は、他者の経験を理解するということをめぐって、いったい何を物語っているのだろうか。

2.2 「爪の痕」が問いかけるもの

おそらく、こうした問題が最もクリティカルに浮上するのは、看護や介護などのケアの現場であるように思われる。実際、そのようなケアの場面で他者と関わる実践者たちは、他者を客体化するのではない、もうひとつの〈他者理解〉を実践している（西村 2007; Butler 2009=2012; 村上 2013; 深田 2013）。そこで鋭く問われているのは、他者が生きる痛みや不安などの「身体の被傷性 (vulnerability)」や「生のあやうさ (precariousness)」を、たんなるそこにある事実としてではなく、いかにして経験として「感

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

受」(深田 2013: 60) または「感知」(Butler 2009=2012: 13) し、これを「汲み取る」(佐藤 2014: 9) かたちで理解することができるのかという問題にはかならない。

しかし、そのような〈他者理解〉とは、いったいどのようにして可能なのか。それはおそらく、逆説的ではあるが、他者を一個の客体として「主題化しようとする態度を極力きりつめ」、これをあえて「中断」することのうちにあるように思われる(鈴木 2008: 11)。それはまた、岡田美智男の言葉を借りれば、「対峙しあう関係」から「並ぶ関係」への移行にあるといってもよい(岡田 2013: 39-40)。具体的なケアの場面を検討する前に、その概要を押さえておこう。

例えば、岡田は「並ぶ関係」における他者との交通の様相を次のように述べている。

一緒に公園を散歩するときなど、いつの間にか歩調が合ってきて、何を話すわけでもないのに、相手の気持ちが伝わってくる(ように思える)ことがある。そのようなとき、二人は「対峙しあう関係」ではなく、むしろ「並ぶ関係」にある。……あるいは、なにげない会話のなかで、かつて二人で観た映画の場面を思い出しながら、懐かしむことは多い。一緒に盛り上がりながら二人でそのストーリーを再構成していく。このような「共同想起対話」の場面でも、二人はその想起すべき対象に対して「並んで」いる。はじめは交互に新たな想起を加え、ストーリーを織り込んでいく。しかし、しばらくすると、相手の発話の一部をなぞり始める。「あっ、そうそう。それで(それで……)、かあさんが(さんが……)、でかけて(でかけて)、あにきが(あにきが)、うちのなかを(かを……)」、相互の発話をなぞっているうち、どちらがどちらの発話をなぞっていたのか、自分の発話なのか、相手の発話なのかわからなくなってくる。……二つの身体が一緒になって、一つの発話を作り上げる。(岡田 2013: 40-1)

このように「並ぶ関係」において、他者の発話や歩調を《なぞる》こととは、自分の「身体」を相手の「身体」に重ねるようにしながら——したがって、相手のみている〈意味世界〉を相手のみているようにみようとしながら——、そこで自らに感じられていることを手がかりに、相手の状態を探る「なり込む」という行為であるといえよう。だからそこでは、(たとえ交わされる言葉は少なくとも)相手の気持ちが伝わってくるという現象も起きえるのだと、岡田は述べている (ibid.: 41)。

以上を確認したうえで、より具体的な〈他者理解〉の場面へと目を移してみよう。以下に取り上げる「爪の痕」(佐藤 2014)は、看護師である佐藤登美が報告している、ある男性ガン患者へのケアにおいて彼女が取り組んだ〈他者理解〉の一場面である。

ある年の正月明け早々、佐藤の勤める病棟に、左大腿神経に原発のガンを抱えたKさんが(5度目の)入院をする。「すでに、Kさんはあらゆる抗癌対策をした後であり、これがたぶん最後の入院となるだろうことが予想されていた」(ibid.: 12)。

2月20日すぎには、入院時から続いていた左下肢の痛みとしびれ感のために、Kさんは独立歩行が困難となる。全身への悪性神経鞘腫の転移が進み、出血と骨折の危惧から、本人には夜間のトイレなど極力歩かないよう注意がなされ、彼のベッドのそばには尿器が置かれた。しかし、Kさんは「歩かないでいると、寝ているまにも歩けなくなってしまうような気がするんです」と、懇願するようにその尿器を断り、歩行器にぶらさがるようにして、歩くことへの執念をみせていた (ibid.: 17)。

だが、26日ごろから、骨盤から両大腿部にゴロゴロと発育してきた腫瘍の圧迫のために、まず左下肢から、運動・知覚神経の麻痺が始まった。「27日の朝、彼は『歩けないんです、足に全能力が入らないんですッ』と、歩行器を前にベッドに腰かけて、(立ちあがろうとして)立てないことを発見し、その驚きで今にも泣きだしそうだった。その顔が、抗癌剤の副作

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

用のために、まるで髭が生えていないせいもあって、おびえた時の子供のようであり、その狼狽ぶりは、ふだんの彼の冷静さをすっかり失っていて、むきだしのまま」だった (ibid.: 17)。28日には、排尿困難が出現し、翌3月1日には、腰部から下腹部へと、麻痺は急速に上行しながらひろがってきていた。そして、その翌日。

3月2日、昨日と同じように、彼は一日中タオルを顔にのせて、仰臥位で身じろぎもしないで、じいっとしているかのように見えた。……誰もがそのタオルを取ることも、取るように本人に言うこともためらわれ、あえてタオルの下の彼の顔に出合おうとはしなかった。そして、回診時、神経診をするために毛布をのけ、寝巻の前を開けた時、下腹部の無数の小さな少し赤い点々がついているのを見つけて、それが爪の痕だとわかると、私(たち)はゾーッととなった。彼は決して、じいっとしていたのではなかった。目を(タオルで)ふさぎ、毛布の下で、少しずつ確実に上行してくる麻痺の進行を、指先で^{つか}抓ることで確かめつづけていたのである。否、じわじわとこじあがってくる麻痺の気配に、そうせずにはいられなかったにちがいない。その何回となく確かめられた、おびたらしい爪の痕は、感覚の^{ある}ところとないところの^{さかい}境めを明瞭にしていた。「もう、足の痛みもしびれもありません…」という、タオルの下からの力のない声が出て、私(たち)は、この爪の痕にゾーッとしながら、それを束の間見続けていたことに、ようやく気づいたのである。……今、彼は共振れをさそう震源であり、その前にいる私は、ややもすれば共振れそうな感じがして、恐いのである。……けれども、このゾーッとするということは、私の他者に対する身体が、^{彼が感じたように感じようとする}、呼応的なはたらき(推測)があって生じていることである。しかも、この推測の重要性は、相手の具体的な生き方を、「私」に探るという点で、言わば共感的であり、臨床場面ではそういうこだわりからしか推測できないようなことも多いのである。……その痛みや麻痺が、彼をしてどんなふうを感じさせ、

彼をして何が起きているのかを推測して、ようやく彼についての何かがわかるのではあるまいか。そしてこの推測は、彼が感じたように、私の“身体”を用いて感じることでしか、なされ得ない。したがって共振れの根拠である私(の身体)は、同時に彼への推測の根拠でもあると言えるだろう。……それは端的には、相手のもつ「思い」を、私にできるだけ具体的に再現すること、だと思われる。しかし、相手のもつ「思い」には、これをはるかにこえるものがこめられている。(ibid.: 19-31)

この場面には、他者の経験を、そこにある事実としてではなく、そこで生きられている経験として理解しようとする看護師たちの構えが鮮明に浮かび上がっている。もちろん、医療的行為のために、看護師たちは患者の身体のある様子を事実として理解することを手放しているわけではない。しかし、患者の生とそのケアのためのニーズを把握するために、看護師たちはときに患者と並ぶようにして、彼／彼女が生きている意味世界を彼／彼女が生きているように生き、彼／彼女が感じているように感じ、これを「私」にできるだけ再現することを試みていく。しかし、それだけに「私」(看護師の身体)は、患者のはかりしれない不安や思いに呼応し、共振れてしまいそうにもなるのである。おそらくそれは、ミシェル・アンリの言葉を借りれば、自らの肉を通じて他者を理解するということ——「自己触発」(auto-affection)を通じた情感的他者把握——であり、「私」の「内部にまだかつて場所を得たことのないもの、すなわちこれまでに感受されたことのないものの感受」として生きられる(吉永 20014: 131)。

そして、そのような経験としての理解において、「他者」ははじめて「私」には理解し尽せない存在であることも実感されるように思われる。「他者」の経験を対象としてのみ理解することは、「他者」を「私」の世界の意味秩序の中に理解可能な一個の客体として包摂すること、あるいは所有＝消化することを意味している。たとえ、それが理解不能な存在であっ

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

たとしても、そうした態度のうちでは、たんに理解不能な存在という事実として「私」の理解可能性のうちに所有される（例えば、「心の闇」などの言葉とともに）。しかし、これをそこで生きられている経験として理解しようとするとき、〈他者〉は「私」の世界の中には決して包摂し尽くせぬ存在であることが経験されるのである（Lévinas 1961=2005）。

2.3 他者の経験を「伝える」ということ

だがさて、こうした〈他者理解〉のあり様を踏まえたとき、他者の経験を（別の誰かに）「伝える」という、質的な調査表現に関わる局面はどのように捉え直されるだろうか。

ここで、これまでの議論をあえて単純化して、他者の経験をあくまでそこにある事実として理解するあり方を（他者理解の英訳のまま）“Understanding”と呼ぼう。対して、これをそこで生きられている経験として理解（または感知／感受）するあり方を、（ジュディス・バトラーの表現を借り受けて）“Apprehension”と呼んでおきたい（Butler 2009=2012）。

ライフストーリー研究やナラティブ・アプローチに取り組む社会学者にとって、調査協力者の経験を、別の他者に一事実として理解（understanding）してもらうにとどまらず、いかに経験として感受（apprehension）してもらえるように「伝える」ことができるかは、質的な調査研究の存在理由そのものに関わる。もちろん、それが他者の経験を「社会的に」理解することに直結するかは次節以降で検討するとはいえ、少なくとも確かなことは、人間の質的な生のあり様を探求する研究であれば、そもそもそれを、そこにある一事実としてしか「伝える」ことができないのであれば、本末転倒となりかねないという点にある。

では、他者に経験を「伝える」、あるいは経験が「伝わる」とは、どういうことなのだろうか。まずは、そこで起こる understanding と apprehension のすれ違いを確認してみよう。

例えば、私たちは、よくコンビニの店員さんから「ありがとうございます」と言われるし、タクシーに乗れば「シートベルトをお締めください」とアナウンスをされる。それらはどちらも、この「私」に向けて発せられているものではある。けれども、その感謝の想いやお願いの気持ちを理解 (understanding) はできるが、別段、それを感受 (apprehension) して、これに共感してしまうなどということはない。あるいは、誰かに悩みを相談したり、されたりする場面を考えてみてもいい。自分が悩みごとを相談して、相手は「うんうん、わかるよ、わかるわかる」と理解はしてもらっているようなものだけれど、どうも受け取ってもらえていない感じがしないと思えることがある。反対に、誰かに悩みを相談されて、相手の言おうとしていることはどうもよくわからないのだけれど、相手の苦しさやつらさだけは受け取ってしまったことがある (cf. 鈴木 2008: 4)。

このように、誰かに経験を「伝える」という場面でも、私たちはしばしば、understanding と apprehension をめぐってすれ違う。おそらくはここでも、語られている経験を、たんに事実として理解するのか、それとも、そこで生きられている経験として理解しようとするのかという、他者との関係をめぐる「構え」が関わっている (佐藤 2014)。もちろん、どのようなカテゴリーに属する相手に、どのような状況で、どのような構えを取りやすいかということ自体が、文脈規定的・状況依存的であるという点は考慮しておかなければならない。例えば、コンビニの店員の「ありがとうございました」に、私たちはいちいちその想いを汲み取ろうと「並ぶ関係」に立とうとはしない。先にみた看護師たちの実践とは異なり、他者の経験を感受しようとする多少なりとも意識していなければ、私たちはその場の文脈や状況の定義にしたがひ、他者の経験をそこにある事実として理解する側面を強めることになる。

しかし、そのことは裏を返せば、他者の経験をそこにある一事実として伝えることも、そこで生きられている経験として伝えることも、そこにど

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

のような相互行為空間をたちあげるのにかに懸かっている、ということでもある。そして、おそらくこれまでの議論から言える確かなことは、他者の経験を、あるいは生を「伝える」とは、他者の経験を対象化して運ぶことではないということである（図1上）。この場合、その受け手は論理的・言語的に understanding はできても、共感的な apprehension はできない。そこからはどうしても当の経験をめぐる身体性やかけがえなさ、どうしようもなさ、わかり尽せなさが抜け落ちてしまう。したがって、他者の経験を「伝える」ということのもうひとつの位相として、他者の生に「身を置ける」ようにすること、つまりその他者が生きた世界や物語の中で、その他者のようにものを見て、その他者のように考え、感じ、ふるまう。そのような空間をたちあげることが、〈他者理解〉の可能性を拓くのではないだろうか（図1下）。

しかし、どうすればそのようなことが可能なのだろうか。また可能だとして、それは「社会学をすること」とどのように関わるのだろうか。

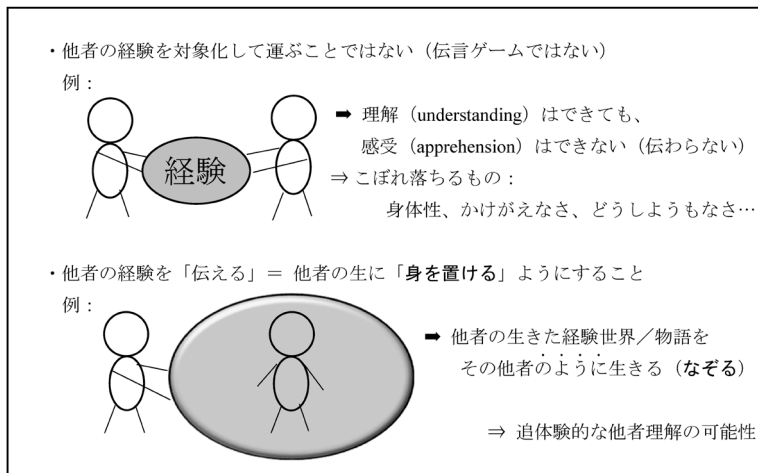


図1 他者の生を「伝える」とは？

というのも、他者の経験はある時空間上における「一回性」(singularité)のかけがえのないものであり、これを正確にリピートするなどということは原理的に不可能だからある。たとえ当時の状況をどこまでも客観的に忠実に再現したとしても(例えば、その日の天気や場所、人やもの、音や匂いといった五感的情報を過不足なく合成していったとしても)、それだけではあの日、あの場所で、それまでの過去や人間関係をたずさえたその人にとって現われていた意味世界が再現されるわけではない(ゆえに、ときに客観的な事実の再現はかえって生きられていた経験を台無しにしかねない)。したがって、私たちはその意味内容は維持しつつ、これを「別の」時空間に、「別の」素材を用いて再構成する術を問われることになる。それはまた、他者の経験世界を、異なる時空間に異なりながらも置き換えるという矛盾と緊張を孕んだ営みでもあるだろう。

そしておそらくは、社会学もまた、多かれ少なかれ「他者の経験を伝える」ためにこの営みに取り組んできたのだといってよい。とりわけ、質的社会学は(かつて誰かがしたように)「そういう状況なら、自分もそうしたかもしれない」「自分もそのように経験したかもしれない」というかたちでの他者理解を、生活史やエスノグラフィの記述によって為そうとしてきたように思われる(岸2016)。だが、社会学はどのように他者の経験世界を別の時空間へと再構成してきたのだろうか。もしかすると、そこにこそ、社会学としてアートベースでの実践を採用する学的な正当性もあるのではないか。

3. 社会学における「世界の二次的構成」技法

では具体的に、社会学における経験世界の二次的な構成の技法をみてみよう。

およそ、どのような調査研究においても、社会学者たちは日常生活者たちの経験を、その意味内容は維持しつつ、異なる世界——社会科学の世界

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

——に再表現してきたといってよい。しかし、〈日常生活世界〉での出来事を「社会科学の世界」での出来事に置き換えるとはどういうことなのだろうか。

よく知られるように、アルフレッド・シュッツによれば、「社会科学の世界」とは、至高の現実たる〈日常生活世界〉から派生した世界である。そして、この世界派生に際し、二つの世界のあいだには比喩的な「意味変容 (modification of meaning)」が生じているという (本嶋 2000: 109)。シュッツは、そうした社会学者たちによって為される二つの世界のあいだでの「比喩的な置き換え」(principle of figurative transference) が、絶えざる緊張と矛盾に満ちているとして、次のように述べている。

現実を [社会的に再] 記述しようとする試みはすべて、或る特定の困難性を伴っている……。その困難性とは、次の事実のなかに存在している。言語は、その体系がそのうえで存立している諸前提 [= 日常生活世界] を超越する意味の媒体になることに対して抵抗するという事実である。それゆえ、派生的意味領域 [日常生活世界から派生する社会科学の世界] をめぐってコミュニケートされうるものはすべて、偶発的でメタファー的な性格 (metaphorical character) をもち、それは言明 (a statement) というよりもむしろ、ほのめかし (a hint) なのである。(Schutz 1996: 38, [] 内は引用者)

つまり、〈日常生活世界〉の中での経験を、「社会科学の世界」の中に置換するという営みは、〈日常生活世界〉内で使われている言葉を「比喩的」に、別様の仕方 で用いるという技法 (art) によって成り立っているのである。実際、社会学が用いるテクニカルターム (システム、劇場、ゲーム、構造 etc.) はすべて比喩であり、そのような意味では社会学の世界もまたひとつの「詩学 (なぞらえ)」の世界であるといってよい。

そして、「図2」にあるように、この二つの世界が《なぞらえ》の関係

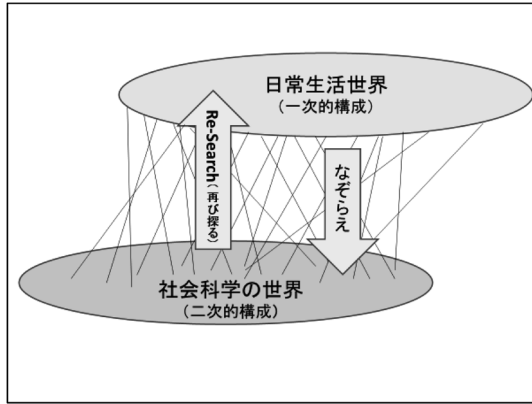


図2 社会学における二次的構成技法

によって結ばれているからこそ、私たちは翻って経験世界について“Re-Search”することができるようになるのだといえる。例えば、アーヴィング・ゴフマンの「ドラマトルギー」は、私たちの〈日常生活世界〉での経験を《演劇》として比喩的に捉え返し、役割演技や自己呈示をする私たちの生の一面を、まさに経験としての実感（apprehension）をとまなうかたちで再現したものにはかならない。

社会学による経験世界の再表現は、シュッツが先に述べていたように、比喩による《なぞらえ》であるがゆえに、「言明（a statement）」ではなく、「ほのめかし（a hint）」として、私たちに新たな認識をもたらしてくれる。それはまさに、「ABRとは、命題を主張するものではなく、事態への洞察をもたらすものであり、事実を確定するのではなく、発見的なものである」（岡原 2013）という、ABRの発想そのものを先取りしていたともいえよう。社会学とは、実はそれ自体がすでにアートとしてしか存立しえないのである。

4. アートにおける経験世界の再現

4.1 箱庭という「小さな世界」をつくるということ

さて、ではアートにおける経験世界の再現とはどのようになされるのか。本稿でひとつめに取り上げるのは「箱庭」である。なぜ箱庭であるかといえば、アートを用いた他者理解の方法を先導してきた臨床分野での事例であること、また箱庭をつくるのが、まさに「小さな世界」を出現させる行為であるということ、にある。

ここで社会学との比較で問いたいのは、クライアントにとって〈現実の世界〉と「箱庭の世界」がどのような関係にあるのか、そしてそれをクライアントとともに眺める人にとっては何が起きるのかという点である。

「箱庭療法 (Sand-play Therapy)」は、イギリスの小児科医マーガレット・ローエンフェルトが、自分の感じていることや思っていることをうまく言葉では伝えられない子どものために、特別に用意した砂場や箱にミニチュアの人物や動物、木々などを置いて自由に表現してもらう「世界技法 (ワールド・テクニク)」を原型とする心理療法のひとつである。

箱庭は、縦57×横72×高さ7cmで、外側は黒く、内側は青く塗ってある(砂を掘ったときに水が現れる感じをだすため)。そこに天日干ししてふるいにかけて砂を3分の2程度まで入れる。クライアントはその砂を掘ったり、選り分けたり、積んだりして基礎となる地形をつくり、そこにさまざまなアイテムを配置してひとつの世界をつくっていく(最相2014:30)(写真4)。カウンセラーは、精神分析的な象徴解釈を押し付けることなく、ただ作られた「箱庭の世界」についてクライアントと対話し、また幾度となく作り直され、変化をみせるその世界をひとつの現実として受けとめ、ともに「物語」を紡いでいく(岡田2002)。

例えば、最相葉月は、臨床家の河合隼雄や木村晴子が受けもったクライアントによる「箱庭」の事例から、そこで起きる様子様子を次のように記している。



写真4 箱庭づくりの一例（出典：Creative Commons／撮影：Kristina Walter）

とにかく、[人によって] まったく違います。箱の半分しか使わない人、……四隅を必ず空けておく人、……喧嘩ばかりする小学生の男の子は、始めのうちは怪獣や動物が入り乱れる激しい戦闘場面ばかり作っていたが、回を重ねるうちに穏やかになり、土地を耕す風景を作ってカウンセラーのもとを去っていった。友だちを泣かせてばかりいる攻撃的な幼稚園児は、当初、動物も自動車も魚も家も、とにかく手にふれるものはどれも次々と詰め込んでいく無秩序な箱庭を作っていたが、途中、激しい戦闘を表現したかと思うと、武器や戦闘機を向かい合わせて間に線を引き、「戦争は終わった」といって一年あまりのカウンセリングを終えた。（最相 2014: 25-32, [] 内は引用者）

ほかにも、例えば、母親とおぼしき存在が「箱庭の世界」に乳牛として登場し、そこで展開される物語を通じて、〈現実の世界〉での母親との関係が結び直されていくというようなこともある。こうしたいくつかの事例は、子どもが生きる〈現実世界〉と「箱庭の世界」とが何らかのかたちで相互反映的に物語を紡いでいる可能性を示唆していよう。しかし、子どもたち自身はそれについて多くを語るわけではない。

では、大人の場合はどうなのだろうか。最相は、カウンセラーの木村晴

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

子のクライアントであった伊藤悦子の「箱庭の世界」について、木村の著作や、木村と伊藤それぞれにおこなった聞き取りに基づいて詳細にまとめている。ここでは最相の紹介をほぼ要約するかたちでその内容をみていこう。

伊藤は36歳のとき中途失明し、57歳のころから箱庭づくりをはじめた。目が見えない彼女にとって、同じく目にはみえない箱庭という小さな世界を「手探り」でつくっていくことには重要な意味があった (ibid.: 115)。以下に示すのは、全15回つくられた箱庭のうちの4回目と12回目の概要である。

「切り立った高い崖に、一人の女の子の人形が置かれている。眼下には花が咲き乱れ、果実が収穫されている。だが、少女はそこにはいない。崖を降りたいが、行くことができないでいる。バケツをもった農婦が家の前に立ち、こちらを眺めている」 (ibid.: 130)。伊藤はこの4回目の箱庭をつくって次のように言う。「崖を降りる勇気がないのではなく、盲目の私は永遠に崖の上に一人であるべきだと思ってるんです」。それに対し、カウンセラーの木村が「行けるよう、道はついてるのにねえ」と応じる。

この頃、現実の世界での伊藤は、「目が見える人と行動しながら、しばしば疎外感を抱く自分がいることをこれまでよりもいっそう強く意識していた」という。「失明した自分と彼らと比較して、何不自由ない生活を送っている彼らに強い羨望を抱いた。そんな自分に気づくといたたまれなくなる」と。「エデン1」と名づけたこの4回目の箱庭は、「木村との出会いによって踏み出せたかに思えた道が、決して平坦ではないことを自分に突きつけているかのようだった」 (ibid.: 130)。

そして、箱庭づくりをはじめてほぼ一年が過ぎた12回目。「いのちの木」と題するその箱庭では、赤い服を着た少女が、箱の右側の近代的な空港から橋を渡り、並木道を抜けて「いのちの木」の下にやってきて、木を見上げていた。「ああ、たどりついた。でもこれから始まるのだ」と伊藤は感じていた。「山の頂上にある大木を目指して、がんばって、ずーっとやって

きて、見上げている女の子、伊藤さんそのままのように思います」と木村。「わかります。でも女の子、世界に入っていけないことが多いですね」。伊藤はそう答えながら、そこまで女の子がたどり着いたことを喜ぶべきなのかどうか考えていた。「うまく新しい出発ができるのか不安でならなかった。ただ作り終えたあと、ホッとしたのは確かだった」という (ibid.: 132)。

実生活での伊藤は、次の一年、南山短大の人間関係研究センターで研修生として学ぶことを決めていた。「不安もあったが、自分の進むべき道がようやく見えてきたのかもしれない」と伊藤は感じていた。彼女は自分の大きな変化を自覚していた。「過去の自分かもしれない少女の人形」は、それ以降、「リュックを背負った若い大人の女性」に置き換わっていくことになる (ibid.: 133)。

伊藤によれば、失明したとき、彼女の暗闇の世界には新しい子どもが生まれていた。チビ悦子である。伊藤は「箱庭の世界」の中で成長していくチビ悦子と自分との関係を次のように語っている。

なんとしても、チビ悦子を育てたかった。……箱庭には本当に自分が出ます。未来もある、今も、過去もある。全部出る。……自分で自分のことを予言しているんです。箱庭は、その時々々の心の状態をリングの切り口のように輪切りにした感じでした。箱庭を作ることで自分に気づき、行動が変化し、さまざまなことを考えて、また箱庭が変化する。それを繰り返しながら、自分が脱皮していったように思います。(ibid.: 134)

ここで彼女が語っているのは、〈現実の世界〉が「箱庭の世界」へ《なぞらえ》られ、それゆえに「箱庭の世界」での変化が、今度は〈現実の世界〉へと《なぞらえ》返され、生き直されていったということであるように思われる。実際、この期間、「伊藤は現実の生活での悩みや苦しみを木村に打ち明け、相談していたわけではなかった」(ibid.: 134)。にもかかわ

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

らず、この二つの世界のあいだはそのような相互反映的な関係の中で生きられていた。

最相が述べるように、「早急な問題解決を目指すのであれば、年単位の時間を必要とする箱庭療法はじれたい。だが、伊藤のように、一度は死を考えるほどの絶壁や人生の大きな転換点に立たされた場合」、クライアントが望むのは目の前の悩みや苦しみを取り除くことだけでも、ただ話を聞いてもらうことでもない。「伊藤に必要なだったのは、自分の人生の物語を自分の力でゼロから紡ぎ直すこと」であり、《なぞらえ》の世界としての箱庭は、それゆえに、伊藤にとっての「杖であり、道標であり、暗い道を照らす灯り」(ibid.: 134)でありえたのだとはいえないだろうか。

こうしたアートが〈現実の世界〉を比喩的に媒介する点について、箱庭療法の影響下でアイテムを（箱の中ではなく）紙の上に絵として配置していく「風景構成法 (Landscape Montage Technique)」を考案した精神科医の中井久夫は、次のように述べている。

言葉はどうしても建前に傾きやすいですね。善悪とか、正誤とか、因果関係の是非を問おうとする。[箱庭や]絵は因果から解放してくれます。メタファー、比喩が使える。……[絵や箱庭の中では]オンボロの肉体だったものが少年へ、水の中の恐竜が着物を脱ぎ捨てて赤ちゃんへ、というふうに変化していきます。……ソーシャル・ポエトリーとって、たとえば絵を描いていると、この鳥は羽をあたためていますね、といったメタファーが現われます。(ibid.: 10, 180, []内は引用者)

ここに明らかなように、アートもまた、(社会学と同様)別の時空間上に〈経験世界〉を再現するために、別の素材(言語あるいは言語以外のアイテム etc.)を比喩的に用いることで、そこに《なぞらえ》の世界を創出しているのである。それはいわば、クライアントが生きる〈経験世界〉を

映し出す比喩的な「鏡」となっている。例えば、「絵や箱庭の中でなら自殺ができる，生き返ることができる，再生を果たすこともできる」(ibid.: 281) のであり，《なぞらえ》の世界は，ときに他者の生をより鮮明に生き生きと映し出していく。

そして重要なことは，カウンセラーという聞き手が，この《なぞらえ》の世界を介して，クライアントという著者が生きる〈経験世界〉の変化と伴走し，ともにその物語を《なぞっていく》ことができるという点にある。中井が述べるように，とりわけ（言語以外の素材を用いることができる）箱庭や絵といったアートが拓く《比喩的世界》は，因果や正誤などをめぐる事実としての理解（understanding）ではなく，それをまさにそこで生きられている経験として理解する（apprehension）ことを受け手に可能にしてくれてもいるだろう。それは「言葉だけでは表現できないもの」や「言葉にしてしまうことでそぎ落とされるもの」を含みこみながら，他者が言葉にしないことそれ自体の意味をも差し出し，聞き手（受け手）に考えさせる。クライアントがいて，そばで見守るカウンセラーがいて，ともに箱庭や絵を鑑賞する。それは，まさに自己と他者が並ぶ関係において「同じ」景色を共有するということにほかならない。

4.2 身体を巻き込むインスタレーション——杉本たまえの『食卓の風景』

絵や箱庭だけでなく，あらゆるアート作品はすべて，何らかのかたちで著者の経験世界を比喩的に再現している。それはときに，私たちの身体において再現されるものでもある。本稿では最後に，杉本たまえの作品を紹介しよう。

杉本は，「対人恐怖症」と「うつ病」に苦しみ，とある精神病院の中にある造形教室を描いたドキュメンタリー映画『破片のきらめき』のチラシをみて，2006年から自身もその教室に通い始めている。しかし，杉本はそれ以前から，すでに創作活動に取り組む表現者でもあった。その造形教

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

室に参加する人々の作品を丹念に考察している荒井裕樹は、彼女の表現を、「作品の底の方にひっそりと痛みがたたずんでいる」と形容している（荒井 2013: 224）。

そして、荒井が取り上げている作品の中でも、私（澤田）がひとときわ自らの身をもってその痛みを《なぞる＝追体験する》ように受けとめてしまったのが、杉本のインスタレーション作品『食卓の風景』であった。これは、構想段階をのぞき、制作作業だけでも10年という年月がかけられた作品であるが、一見ただ真っ白い四人分の食器がすべて石膏でつくられているだけのようにもみえ、そのタイトルにふさわしく、「四人家族の食事風景の一瞬を切り取ったような作品」となっている（ibid.: 229-30）。

しかし、何だか言いようのない、不思議な違和感が身体に残り続けてしまう。それは、通常の「食卓」というものが有しているはずのものが、いくつか欠落しているからであり、私たちが抱く「食卓」のイメージとは何かがずれているのである（写真5）。

この作品について、荒井は次のように述べている。

たとえば、ここからは音が聞こえてきません。「食卓」というのは、朝食であれば慌ただしい支度の雑音が混じるものですし、夕食であれば家族の談笑がつき物です。しかし、この「食卓」はまったくの無音状態であるかのような印象を受けます。また、ここからは温かみも感じられません。料理そのものの温度も、それを共にする家族の温もりのようなものも漂ってこないのです。加えていえば、生活感もありません。毎日使うテーブルや食器には、食べこぼしたシミや、不意につけてしまった傷の一つくらいはありそうですが、そのようなものもありません。完璧なまでに真白なのです。そして、これらの食器をよく見ると、食器が食器であるための絶対条件ともいべきくぼみが全くないことに気づかされます。すべての食器は、縁の高さで水平に埋められており、どんな料理も盛りつけることができない状態になっています。（ibid.: 229-30）



写真5 《食卓の風景》(製作: 杉本たまえ (2012) / 撮影: 大西暢夫)

杉本によれば、この《食卓の風景》は、彼女が経験していた現実の〈食卓の風景〉を、そこで生きられていた身体性をも含めて再現しているのだという。それは家庭内での深刻な虐待といじめ、食卓にまつわる痛々しい思い出である。

食事の支度や片付けは、いつも私がした。だから家族と一緒に食べなかった。みんなが食べているとき鍋やフライパンを洗った。……食後に食器を洗う時ガチャガチャやると「うるさい」と叱られ、私は家族三人が楽しそうに食事をしている後ろ姿を見ていた。(杉本たまえ「絵と私と黒い世界」『第19回“癒し”としての自己表現展』)

この作品には、「食卓」=「家族団欒」というイメージとはかけ離れた心の距離感(隔絶感)が表現されており、虐待のなかで冷えきった食卓に対する心——無表情で無感動な心——と、その冷やかさや静けさの奥底にあ

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

る激しい心のうごめきが《なぞらえ》られている。それだけに、この作品の中に身を置くと、その人は杉本が経験していた〈食卓の風景〉を、身をもって《なぞる》ことになる。あのとき、彼女には本当にこのように世界が現れていたのかもしれない、と (ibid.: 232)。

アートによる再現は、この場合、言葉だけでは伝えられない身体に生きられている経験や物語を、共有ではなく、受け手の身体へと「贈与」する営みとなっている (Boltanski 1990)。けれどもそれは、決して「私」の一部とはなりえない贈りものでもある。他者の生を《なぞる》(＝同) という行為は、絶えずその《なぞり切れなさ》(＝他)を確認し続ける行為としてしか成立しえないからである。だが、この《なぞり切れなさ》——杉本の作品でいえば、隔絶感や拒絶感——こそが、何かを私たちの身体において語り、証言する。この声は、だから《なぞる》という行為がなければ聴くことができない。そのためにこそ、人は《なぞらえ》の世界という特異な可能性の空間を「今ここ」へと立ち上げてきたのだとはいえないだろうか。

5. おわりに——アートベースではじめて出逢える〈他者〉の生

以上の考察から、私たちはふたつのことを確認することができる。

ひとつは、社会学とアートがともに、他者によって生きられた経験世界を、比喩的に再現した《なぞらえ》の世界を創出する営みであるということ。もうひとつは、そうした《なぞらえ》の世界の中においてこそ、私たちは他者の生を《なぞる》ように、そこで生きられている経験としてこれを理解 (apprehension) することができるということ、である。

他者の生を理解するということは、他者をひとつの客体としてだけまなごすような「対峙する関係」からはうまれない。それは他者の経験を、たんにそこで起きている一個の事実としてだけ理解 (understanding) することへの帰結を呼び込みかねない。そうではなく、他者の経験を理解する

こととは、他者のみている（生きている）世界をその他者のようにみようとする（生きようとする）「並ぶ関係」からこそうまれうる。そして、そうした他者によって生きられた一回性の経験を《なぞる》という営みは、まさに社会学やアートが取り組んできた《なぞらえ》の世界の創出によって可能となりうる。

しかし、その上で敢えて問うとすれば、これまでの「科学的言語」（それ自体が実は比喻である）を中心とした社会学と「アートベース」での社会学のどちらがその再現可能性という点で、あるいは他者の生をめぐる追体験可能性という点で、身体性や感情といった言語化し尽せない層の経験さえ含みこんだ質的な他者理解をもたらすだけの厚みもちうるだろうか。もちろん、本稿の考察だけでは、どちらが優れているとは簡単に言うことはできないかもしれない。けれども、少なくともアートベースでの社会学によってしか探求しえない経験、あるいはそもそも出逢うことができない経験を、私たちが現に生きていることだけは確かだろう（図3）。

それはもしかすると、私たちが身体をもってこの世界を生きているということ自体が、本当はすでにして比喩的なことからであるからなのかもしれ

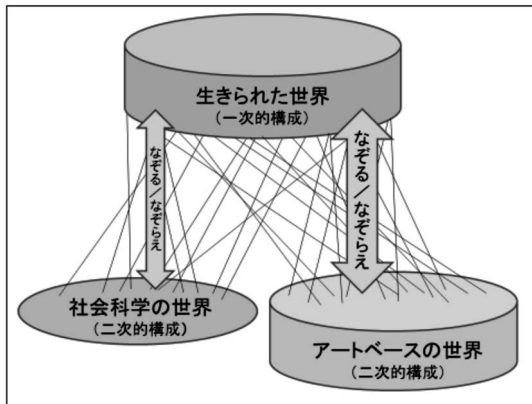


図3 アートベースでしか探究しえない生

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

ない(澤田 2014b; 2016)。例えば、熊野純彦は、「哲学者は詩人でありうるか」という副題が付された著書の中で、そうした経験世界の比喩性について次のように記している。

世界はたんに、知的な意味によってだけ満たされているのではない。世界とその内部の対象は、そのつど情動的な意味とともに……いつでも比喩的なかたちで与えられている。……断崖ばかりではなく、人柄も峻厳でありえ、岩石だけではなく、意志もまた堅固でありうる。山稜だけがなだらかに優美であるばかりでなく、メロディーもひとの立ちふるまいも優雅でありうる。そうしたいっさいが比喩であるというなら、世界と世界をめぐる経験、世界を語ることは、そもそも根本的に隠喩的なしかたでなりたっているといつてよい。世界はいつでも、たんなる外的な世界、物的な世界以上のものとして与えられ、そのつど詩的な比喩としてもあらわれているのである。(熊野 2005: 41)

すでに私たちは、彼のこの言葉に続いて次のように言うことができる。私たちが他者とともに生き、経験するこの世界、すなわち社会的な意味世界もまた、絶えず比喩的に構成されている。それゆえに他者の経験、あるいは他者の生を理解し、伝えようとする社会学者もまた詩人でありえ、またときに詩人であるべきなのだ、と。

付記

本稿は、岡原正幸・高山真・澤田唯人・土屋大輔(2016)における澤田担当箇所(3.『「他者理解」をめぐるアートと社会学』)において十分展開できなかった点を大幅に加筆し、修正を加えたものである。また本研究の一部は、平成 28 年度日本科学協会笹川科学研究助成金を得て取り組まれた成果である。

参考文献

- 荒井裕樹, 2013, 『生きていく絵——アートが人を〈癒す〉とき』 亜紀書房.
- Boltanski, L., 1990, *L'amour et la justice comme compétences: trois essais de sociologie de l'action*, Paris: Métailié.
- Butler, J., 2009, *Frames of War: When is Life Grievable?* London & New York, Verso. (=2012, 清水晶子訳 『戦争の枠組み——生はいつ嘆きうるものであるのか』 筑摩書房.
- Coulter, J., 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan. (=1998, 西阪仰訳 『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』 新曜社.)
- 深田耕一郎, 2013, 『福祉と贈与——全身性障害・新田勲と介護者たち』 生活書院.
- Garfinkel, H., 1952, *The Perception of the Other: A Study in Social Order*, Ph. D Dissertation, Harvard University.
- Goffman, E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Northeastern University Press.
- 原紘子, 2016, 「アートベース・リサーチの実践——調和と不調和が交差する新たな実践に向けて」『育英短期大学研究紀要』 33: 1-11.
- 岸政彦, 2016, 「【インタビュー】社会学の目的」『at プラス: 思想と活動』 ([www.ohtabooks.com/at-plus/entry/12443/index_4.html] より 2016年11月20日取得)
- 北山聖子, 2016, 「生成／～になる」 ([http://signedevents.com/japan/koto-ku/生成～になる_北山聖子/] より 2016年11月20日取得)
- 熊野純彦, 2005, 『メルロ＝ポンティ——哲学者は詩人でありうるか』 日本放送出版協会.
- Lévinas, E., 1961, *Totalité et infini, essai sur l'extériorité*. (=2005, 熊野純彦訳 『全体性と無限 (上・下)』 岩波文庫).
- Mills, C W., 1963, "Situating Actions and Vocabularies of Motive," I L Horowitz ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford, London & New York: Oxford University Press, 439-68. (=1971, 田中義久訳 「状況化された行為と動機の語彙」 青井和夫・本間康平監訳 『権力・政治・民衆』 みすず書房, 344-55.)
- 村上靖彦, 2013, 『搞便とお花見——看護の語りの現象学』 医学書院.
- 本嶋学, 2000, 「A. Schutz 現象学的科学論のレトリック的転回——人間科学のレトリックとしての A. Schutz」『現代社会理論研究』 10: 109-20.

他者の生を《なぞる》ための、今ここの《なぞらえ》の世界

- 西村ユミ, 2007, 『交流する身体——ケアを捉えなおす』日本放送出版協会。
- 岡田美智男, 2013, 「人とロボットの生態学的コミュニケーション」河野哲也編『知の生態学的転回 3 倫理: 人類のアフォーダンス』東京大学出版会. 29-51.
- 岡田康伸, 2002, 『箱庭療法の現代的意義』至文堂。
- 岡原正幸, 2013, 「パフォーマティブ社会学宣言」『NIPAF 2013』NIPAF.
- 岡原正幸・高山真・澤田唯人・土屋大輔, 2016, 「アートベース・リサーチ——社会学としての位置づけ」『三田社会学』21: 65-79.
- Rolling, J., 2013, *Arts-Based Research*. Peter Lang Primer.
- 最相葉月, 2014, 『セラピスト』新潮社。
- 澤田唯人, 2014a, 「『時間が解決してくれる』ということ——生の脈拍 (*é-motion*) の傍らで」岡原正幸編『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会. 37-55.
- , 2014b, 「隠喩的対話という技法——『語り得なさ』をめぐる当事者実践の社会学」『三田社会学』14: 34-54.
- , 2016, 「腫れものとしての身体——『境界性パーソナリティ障害』における感情的行為の意味」『社会学評論』66(4): 460-79.
- 佐藤義之, 2014, 『態勢の哲学——知覚における身体と生』勁草書房。
- 佐藤登美, 2014, 「“からだ”に纏う力とリアリティをもとめて」, 佐藤登美・西村ユミ編『生きるからだに向き合う——身体論的看護論の試み』へるす出版, 8-54.
- Schutz, A., 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff. (=1983-5, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第1-2巻——社会的現実の問題I-II』マルジュ社.)
- , 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff. (=1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻——社会理論の研究』マルジュ社.)
- , 1966, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff. (=1998, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第4巻——現象学的哲学の研究』マルジュ社.)
- , 1996, *Collected Papers IV*, Kluwer, Academic Publishers.
- 鈴木智之, 2008, 「他者の語り——構築と応答のあいだで」『三田社会学』13: 3-16.
- Weber, M., 1913, Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie. *Logos; Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, Bd. IV, H. 3. (=2002, 林道義訳『理解社会学のカテゴリー』岩波書店.)
- 吉永和加, 2014, 『感情から他者へ——生の現象学による共同体論』萌書房。